



最終回

伯耆町が進める「保小中一貫教育」とは

——子ども達の「15歳の出口」の姿を見通して

前は、「伯耆I学習」の全町共通単元についてお伝えしました。今回は、保小中一貫教育が想定している子どもたちの発達モデルについてお伝えしたいと思います。

「15歳の出口」に向けて子どもたちをどのように育てるのか？

みなさんは「9年生」という言葉をご存知でしょうか。鳥取県内には、湖南学園や若桜学園といった小学校と中学校が一体となった小中一貫校があります。これらの学園では、「中学3年生」とは言わず、「9年生」と呼んでいます。これはまさに、小中の9年間を意識した呼び方だと言えます。ただし、この9年間の中に、子どもの発達段階に応じたいくつかの時期を設定して、重点を決めた取り組みをしています。このような発達は、小学校と中学校の区切りをまたいで設定されることが多くあります。

小中の区切りをまたぐ

子どもたちの発達モデル

本町が進める「保小中一貫教育」では、現在のところ、小中の校舎を一体とする学校をつくるのではなく、あくまでも小中の校舎が分離した学校形態を継続しながら、学習指導と生活指導において一貫した教育を行うことを目指しています。その前提に立って、就学後の発達期の区切りを「4年・3年・2年」と考えました。それが次の図です。

●目指す人間像と各発達期のかかわり

前々期 保育所～年長 基盤形成期	前期 小1年～4年 基本期	中期 小5年～中1年 定着期	後期 中2・3年 発展期
基本的な生活習慣の基盤を身に付け、「環境」と関わりあう楽しさを体感する	基礎基本を繰り返して習熟を図り、基本的な生活習慣を身につける	基礎基本を確実に身につけ、思考力・判断力・表現力などを伸ばし、規範意識を高める	基礎基本を応用し、個性を伸ばし社会性を育む
学ぶ喜びを体感する 人と関わる喜びを体感する 生活の仕方や決まりを体感する	学び方を学ぶ 人と関わり方を学ぶ よりよい生活の仕方学ぶ	自ら学ぶ 自ら人とよりよく関わる 自らよりよい生活を創造する	

就学前の「前々期」、小1～小4の「前期」、小5～中1の「中期」、中2～中3の「後期」と発達期を区分し、学習指導と生活指導の重点を設定しています。例えば、前期の生活指導の重点は「基本的な生活習慣を身につける」ということです。

「保小中一貫教育」が目指す

人間像の実現に向けて

ところが、これだけでは実際の取り組みにつながっていきません。身につけるべき「基本的な生活習慣」とは何なのかについて、教職員・保護者・地域が協議し、具体的な目標を定め、協働的な取り組みを行い、結果について検証することが必要不可欠です。

保小中一貫教育が保育所・学校だけの取り組みに終わってしまったり、多くの成果を期待することはできません。保護者・地域の方と連携してこそ、目指す人間像の実現に近づくものと考えています。「保小中一貫教育」と「地域とともにある学校づくり」は車の両輪として推進していくべきものであると捉えています。

4月から全6回にわたって、本町が進める「保小中一貫教育」についてお示ししました。

本来、教育は具体的な子どもたちの姿に基づいて語られるべきものだと考えます。今後とも本町の教育につきまして、町民みなさんのご意見・ご協力をお願いします。

【問い合わせ先】教育委員会事務局 総務学事室 電話6210927